

第一学院

Daiichi Gakuin



ネットワークが、生徒と社会を結び
新たな自分の可能性を発見するための窓になる。
全国に四八のキャンパスを持つ通信制高校『第一学院』。
その視点は、次世代の人材育成に向けられている。
竹下淳司副理事長に、お話を聞いた。

ネットワークを通じて伝える、これからの生き方のデザイン

ICT技術の導入により、全国の生徒が同一品質の授業をリアルタイムで受けられるとともに、そうした技術をキャリア教育にも活かすという新しい取り組みをしているのが第一学院高校です。まず、第一学院のICT化はどのように進歩してきたのでしょうか？

第一学院は二つの本校と、現在全国に四八箇所のキャンパスをもつ通信制高校です。もともと通信制高校はレポートや添削といった郵送による紙のやりとりが多く、これらをインターネットで効率化できないかというのが動機でした。さらに技術が発達して授業のライブ配信や、タブレットの活用が定着してきた今は、さらに学びを「個別最適化」する方向へシフトしてきています。生徒一人ひとりに対して、医者の処方箋のような、個別のカリキュラムを提供することがいまの課題ですね。学びのライフログを残しながら、そのプロセスをデータで可視化していくことにチャレンジしています。

また、第一学院には、不登校を経験してきた生徒も多く在籍しています。二五才での社会自立を指標とし、卒業の先に何があるのか、これからどう生きていくのか、といった社会自立をテーマにした教育プログラムに重点を置いています。生徒たちがさまざまな不安を抱えるなか、基本的な生活習慣や対人関係などを改善しないかぎり、学力も安定、向上しないというデータの蓄積に基づき、土壌となる「自己肯定感」を育てていこうというものです。

具体的にはどういったカリキュラムに繋がるのでしょうか？

人間関係がうまくいかず、自分を過小評価してしまっている生徒に対し、他者から認知される機会を与え、自分が周囲にどう認知されるか

れているかを客観視できるようにするので、テストの答えよりも、答えを求めるプロセスの方が大切なのです。問題を解く技術だけではなく、自己肯定感を育むことで、身の回りにおける色々なことに対応できる。他者との関わりの中で自分を知る。こうした関わり方の手段として、ICT技術活用の可能性を感じています。

「チャレンジャーズ」では、地方にいる生徒もプロフェッショナルと繋がることができ、さまざまな質問を投げかけることができます。ここでは、夢を追いかけている人たちの成り立ちや自己概念を、生で知ることができます。学生のときだけではなく、どんな世界に行っても辛いことはある、不安もあるけどその分チャンスも大きい。いわば自分の人生のデザインの仕方を教える授業です。そのため、生徒にとって共感度の高いアーティストやタレント、クリエイターといった方々に参加いただいています。

大学進学も目標の一つですが、その先にある可能性を「チャレンジャーズ」を通じて知ってほしいですね。そのために、まずは生徒本人が興味や関心を持つことが大切。一つの答えを重視しすぎると、その先を考えなくなってしまうんです。

一方「スタートアップ・スチューデント・プロジェクト」は地域の課題を生徒たちが共有し、アントレプレナーシップを身につけるという授業です。それ以外にも第一学院の各

校舎では、教室を飛び出し、自分たちの地域に目を向け、溶け込むためのフィールドワークの時間をできるだけ多くとっているそうですね。

地域の人や地場産業ならではの良さを知り、ボランティアを含めて貢献していくという、学校の中で完結しない教育に八年ほど前から取り組んでいます。通常、学校は校舎のあるひとつの地域の体験しかできませんが、第一学院は全国に四八の拠点があり、地域の課題もそれぞれ違う。それらを生徒同士が共有できるというスケールメリットがあります。第一学院では、「地域も学校」と捉えているんです。

「スタートアップ・スチューデント・プロジェクト」もその一つで、目指しているのは、地域を超えたプロジェクト型学習。今後、人工知能が発達していき、めまぐるしく社会が変化する中で生き抜くための起業家精神を身に付けるためにスタートしました。将来はオンラインで課題を共有し、働きながら、地域に貢献できるソーシャルアントレプレナーの排出を目標にしています。プログラムは現在、盛岡、岡山、広島の三箇所を実施されています。

生徒たちにはどんなミッションを与えられたのでしょうか？

地元の特産品の商品化、ブランディング、そして販売です。岡山キャンパスで生徒が選んだのは、誰もが知っている名産品の桃ではなく、なんとトマトでした。地元の農家の方にプレゼンして理解を得たり、プロジェクトを通じて、生徒たちはマーケティング、デザイン、口コミのつくりかたなど、さまざまな経験ができたと思います。また、マルシェでは、岡山の生徒がプロデュースした商品を、東京の生徒が売るという連携も行われました。ネットワークがなければ実現できなかった



スタートアップ・スチューデント・プロジェクト

AI技術の発達により、今後10~20年で47%の仕事がAIにとって変わる。こんな時代を生き抜く起業家精神を身に付けるため、ブランディングの第一人者、村尾隆介氏を講師に招いてスタートしたプログラム。地域の課題を拾い上げ、ビジネスに繋げる社会貢献の視点もプログラムに盛り込まれている。テレビ会議システムで全国のキャンパスをつなぎ、グループ学習でコミュニケーションを取りながらプロジェクトが進められた



トマトジュースは協力農家へのプレゼンテーション、プランドコンセプト、オリジナルパッケージ、ポスターなどの広告、販促用レンビ、販売戦略を高校生自身が考えて商品化。マルシェ等でも販売



生徒たちが開発した商品は、「chariteens (charity + teens)」というオリジナルブランドとして、下記のサイトで販売されている <https://chariteens.com/>



第一学院 副理事長 竹下淳司さん

第一学院高等學校
第一学院
電話 0120-761-080
web www.daiichigakuin.ed.jp